

---

# 大切な忘れモノ

クルクルココロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大切な忘れモノ

### 【Nコード】

N5977U

### 【作者名】

クルクルココロ

### 【あらすじ】

風呂場で頭を打ったコウタは大切なモノを忘れてしまう。

果たしてコウタの忘れてしまった大切なモノとはなんだったのか。

彼は徐々に大切なモノを思い出していく。

彼が最後に見つけた大切なモノとは……。

(前書き)

ちょっと長いです。是非、縦書きにして読んでみてください。

僕は大切なものをなくしてしまったようだ。今となってはもう思  
い出すことができない。だけど悲しくはないよ。だってしょうがな  
いじゃん。なくなってしまうものはもう戻ってこないし、いくら  
焦ったところで誰も譲ってくれない。お金だって同じようなものさ。  
なくなっちゃったら最後。誰も助けてくれない。銀行に行ったら  
無駄さ。あそこは担保がない人にお金なんて貸してくれやしない。  
本当に心から信頼できる友達がいればよかったんだけどな。あいに  
く僕は、人と付き合う才能がまるでなくてね。いや、確かにしゃべ  
ったり、一緒に笑ったり、悪口を言い合ったり、そういうことはで  
きるさ。だげどそれは誰にだってできるじゃないか。自分の喉をふ  
るわせて声を出す。それだけ。すると相手はそれに対して何らかの  
反応を示す。それはいと簡単に達成できるものさ。例えば、いつ  
も学校のテストで満点近く叩き出す優等生が次の期末テストで目標  
点数を60点ぐらいに設定して、それで満足するようなそんな感じ  
あれ、ちよつと違うか。まあ、そんなことは実は僕にとってどうだ  
つていいんだ。そういえば、この前、サン・テグシュベリだったけ  
な、いや、ザン・テクジユヘリだったつけ。もういいや。とにかく  
誰かが書いた「星の王子様」っていう本を読んだんだ。半ば無理や  
り読まされたといったほうがいいかもしれない。僕の家族はとにか  
くおせっかいやきなんだぜ。ちよつと僕が変な行動をとったり変な  
言葉を言っただけでもものすごく心配するんだ。一体どうしたの、何  
があつたのってね。そして病院送りさ。僕自身はこれっぽっちも不  
安に思っていないんだぜ。でも、僕もあんまりみんなが心配するから  
段々僕も不安になってきたんだ。そして、今は病室のベッドの上で  
寝そべったり、こつやつて文字を書いたりしてるんだけど、一体な  
んでこんなことを始めたんだつけ。……。あ、そうだ。「星  
の王子様」を読んだんだよ。あれは名作だったね。言葉は幼稚なん

だけど、ものすごくいい話なんだ。特に親友とか心の底から好きな恋人とかがない僕にとつては、あの話は夢のまた夢みたいな話なんだけど、でもなんだか感動しちゃったんだよ。本当に奇妙な話さ。今まで、テレビのドラマや映画なんかで感動したことなんか一度もなかったんだ。これはほんとにそうなんだ。涙も流したことなかったし。だって、男が泣くなんてそんな恥ずかしいことできるわけないだろ。でも、あれを読んだときは、もう少しで泣きそうになっちゃったんだ。どういうわけかはさっぱり分からないんだけど、とにかく涙が出そうになったんだよ。少し怖かったね。なんだか、今までの自分が全部否定されちゃったようなそんな感じがしたよ。僕は今までそんな経験一度だってなかった。でも、泣くまいといくら思っても泣いちゃったんだ。そのとき、僕恥ずかしくて恥ずかしくてたまらなかつたんだけど、好運にも、その本を読んでいたときには病室には誰もいなかったんだ。あれは奇跡としか言いようがないね。僕は四人部屋の病室なんだ。一人は気のいい40ぐらいのおじさんで、もう一人はたぶん80ぐらいかな、それぐらいのじいさんがいるんだ。そして、一つは空きになってる。丁度40のおじさんはトイレに行つてて、80のじいさんは散歩に出かけていたんだ。そのおかげで、僕が惨めにも涙を流していることがバレずにすんだ。今振り返つてみると、もしかしたら僕は生まれてからずっと大きな間違いを繰り返して続けたのかもしれない。違う生き方をしていたらこんなにつらい思いをすることなく一生を終えることができたのかもしれない。でも、そんなことをいくら言つたところで一度嫌われちゃったガールフレンドともう二度とキスができないように、失ってしまった時間は決して戻ってこない。まさかね。僕が小説の主人公になるなんて思つてもいなかったよ。

目を覚ますと、天井が見えた。白い天井だ。蛍光灯の光がまぶしい。声が聞こえてきた。

「目が覚めましたか、どうです、気分は悪くないですか」

声のするほうへ目をやると、若い医師が座っていた。左の胸には名札がついている。澤田俊。なんだかさわやかな名前だ。

「よかった、無事みたいね。お父さんとお母さん心配したのよ」

医師の隣には僕の父と母が座っていた。二人ともどうやら安心してみたいで頬の筋肉が緩んでいる。

「お風呂場で足を滑らせたのか、強く頭を打ったみたいよ。二日間も昏睡状態が続いていたんだから、もう」

母は大きいため息をつき、なぜが怒りにも似た感情を吐き出した。相当息子の身を案じてくれたのである。僕は二日前の風呂場での出来事を思い出そうとしてみた。・・・・・・・・確か、浴槽に入る前にシャンプーをして、リンスを髪につけ・・・・・・・・。その後が思い出せない。体を洗ったのか、洗い終えたのかすら覚えていない。一体何が起きたというのだ。

「一応、念のために脳波のチェックをして、MRIも撮っておきま

しょう。もしかすると脳になんらかの異常があるかもしれないで

医師はそう言う僕に満面の笑みを投げかけた。僕を安心させようとしているのだろう。父と母にも同様に微笑みかけ、小さく会釈をすると病室から出て行った。

「心配したんだぞ、全く。風呂場でこけるなんてお前も抜けたところがあるんだな」

父はそう言う高らかに笑った。

「ちよつと、コウタは死の淵をさまよっていたのよ。目を覚ましたからよかつたけど」

母は笑っている父を諷めた。父は母と僕に悪かったと謝ると、窓の外に視線を飛ばした。

「終わりよければすべてよしってことだ。あれ、使いどころがちがうか」

そう言うときまた父は笑い出した。母はあきらめて父の代わりに僕にもう一度謝った。でも、そのとき僕は全然怒ってもいなかったし、悲しんでもいなかった。そもそも自分の身に何が起こったのか全然分かっていなかったのだ。ただ、自分が病室のベッドで横になり点滴を受けているという状況を客観的に見てみると、何か尋常ではないことが起きてしまったことは直感で分かった。

僕は目覚めてから一週間、検査入院という形で入院生活を送った。受けた検査は脳波検査、MRI、心理テスト、知能テスト。ほかに毎日午前十時に医師との面談があったが、これといった異常は見られなかった。それを聞いた父と母は、肩の力が抜けたとか、これから安心して仕事に行けるとかそんなことを言っていたが、僕からしてみれば異常が見つからないことは明らかだったし、医師に何もなくて本当によかったですねと言われても嬉しくも何ともなかった。だって、普通に手も足も動かせるし、話も不都合なくすることができる。唯一気がかりなことは、転んでから おそらくとしか言えないのだが 約二日間の記憶が全くないということぐらいであっ

た。というか、今でも自分が風呂場でこけて頭を打つたなどという事実が信じられないでいた。しかし、頭の右後ろを手で触ってみると大きなこぶができており、強く押すと熱せられた太い針でズブツと刺されたような痛みが走る。それで僕はしぶしぶ、転んで後頭部をぶつけてしまったという自分でも信じられないぐらい滑稽な事件を認めざるを得なかった。

一週間後、僕は晴れて自由の身となり、と言っても学校はあるのだが、宇都後高等学校に以前と同じように通うことになった。宇都後高等学校は創立150年の歴史ある学校で、校訓は我学ぶゆえに我あり。どう見てもかの有名な哲学者デカルトの真似事であるが、高校の教員は誰一人としてそのことを恥じてはいない。むしろ、誇らしげに校訓を朝礼や集会で話すのだ。中にはこの校訓を溺愛している教師もあり、まるでデカルトよりも先に校訓があったかのように話すのだ。その調子を含んだ話を聞くたびに僕はいつも吹き出しそうになる。そういう教師陣がこの高校を取り仕切っているのだ。だけど、僕はこの高校が別に嫌いであるとか登校したくないとか、そういったことを思ってるわけではない。そりゃ少しは不満があるけど校舎はつい三年前に改築されたばかりで、とても綺麗だし、中央棟にはエレベーターまで備え付けられている。言い忘れていたけれど、宇都後高校は大きく分けて三校舎ある。一年生は校門に一番近い棟で、奥に行くにつれて順に、二年生、三年生の校舎となっている。それぞれの校舎は上から見ると細長い長方形をしているが、中央部でつながっており、全体を見下ろすと漢字の王のような形をしている。エレベーターは中央棟のど真ん中に作られており、なぜそのような不便な場所に作ったのかはさっぱりわからないのだが、二年生以外は非常に使いづらくなっている。一年生にいたっては、校門から自分の教室に行く途中にエレベーターがないため、もしエレベーターを使おうとすればわざわざ遠回りをしなければならぬ。エレベーター業者は頭が悪かったのだろう。僕だったら絶対A棟（正式名称は一、二、三年生の棟をA、B、C棟と呼ぶのであ

る)に作る。そうすれば全学年が登校したときに平等に使うことができる。しかし実際は中央棟にあるため一年生はほとんど使わないのだ。中には積極的にエレベーターを使う物好きもいるが、大抵の生徒は一週間もすればエレベーターホールに出むくほうが面倒くさいことに気づく。こんな不便な場所に作られてしまったエレベーターホールであるが、そこにはなんと4基ものエレベーターがある。さすが私立だ。中学時代友達だったやつで公立に進学したやつがいたけれども、聞いたところによると公立高校はせいぜいエレベーターがあつて2台だそうだ。エレベーターが4台も設置されていることは確かにありがたいことなのだが、僕自身はこのエレベーターの存在価値についていささか疑問をもっている。まずうちの校舎は三階建てだ。最大でも二階分しか上らない。階段を上るよりエレベーターが来るのを待っているほうがよっぽど時間がかかったりする。それだったら運動の意味もかねて階段を上ったほうがいい。聡明な生徒たちはみんなそのことに気づいているようでエレベーターホールはいつも空いている。登下校時でも空いているのだ。エレベーターを使うときといたら何か重い荷物を運ぶときぐらいである。ところが、完全に全てが電子化されてしまったこの時代、体育と実験を除いて教室移動というものはほとんどなくなってしまうていたし、教科書やノートも全て自分専用のスクリーンデスク(通称スクデ)に保存されている。スクデに入力されたデータを校内にあるデータベースに転送しておけば、インターネットにつながる場所ですべてもデータを引き出すことができる。自宅で学習したのもデータを送っておけば、学校のスクデで見ることが出来る。一昔前は分厚い教科書やノート類を家と学校までの間持ち歩いていたらしいが今では全く想像がつかない。全生徒がほとんど手ぶらで登校している。紙の本を取り扱っていた書店というものが昔はあつたらしいが、僕はいまだかつて見たことがない。中年から老年層の人々の中には書物愛好家が結構いて紙の書物をコレクションしたり、同好会を作ったりして色々と交流しているみたいだが、僕にはさっぱり魅力がわ

からない。あんなに重くて読みづらいものものどがいいのだろう。転送もできなければ保存もできない。話がそれってしまったが、とにかく学生は登校や教室移動の際、手ぶらなのだ。身軽なのにわざわざエレベーターホールまで出向いてボタンを押してエレベーターが来るのを待つ生徒がいるわけがない。ところが不思議なことに教師たちはこのエレベーターを高校の売り文句にしているのである。我が校には安全快適なエレベーターが四基もあり、広々としたエレベーターホールが併設されておりますたらなんとら高校のホームページトップにでかでかとして書いているのだ。それ以外に何か誇れるものはないのかと少し歯がゆく思うこともあったが、考えても無駄なことなので、そのようなことについて考えをめぐらすのはやめることにした。

そんな学校に久々に来た。校門では先生が両脇に二人立って登校してくる生徒に挨拶をしている。その光景を見るたびに僕はあれほどつらい作業はないだろうなとつくづく感じる。なぜなら誰一人として返事を返してくれないのだ。ほとんどの生徒はあたかもそこに人がいないかのように通り過ぎていく。いや、それならまだいい。最悪なのは一瞥をくれてそのまま表情を変えることなく通り過ぎる生徒だろう。そのような場面を見るたびに僕はこう思うのだ。教師にだけは絶対になりたくない。僕は教師ほど自分の好意が踏みにじられる職業をほかに知らない。

「おはよう」

右脇の教師が僕に挨拶をしてきた。いつもどおり僕はその言葉が聞こえない振りをして教師の前を通り過ぎた。僕の後ろで、その教師がまた繰り返す。おはよう。だが、その言葉は宙を漂うだけでその教師のもとへ返ってくることはなかった。

教室の扉を開けるとすでにクラスの半数以上の生徒は登校していた。始業時間の三十分前にしては多いほうだ。僕の席は窓際の後ろから二番目である。席に座って、側面にあるスクデの電源を入れるとスクリーン上にデスクトップが現れた。

「久々だな。この一週間何してたんだよ」

不意に声をかけられた。振り向くと僕のクラスメートである笠原ツトムが携帯電話のストラップを右手でくるくる振り回しながらこちらに向かってきていた。彼は、僕のクラスで唯一の友達、いや、友達と呼べる生徒である。茶髪の髪にはゆるいパーマがかかっており、肌は日に焼けて髪と区別がなくなっている。背は僕より5センチほど高い。いわゆるスポーツ少年であり、小さい頃からサッカーをやっている。顔も女受けのいい造りをしていて、クラスの女子からはかなり人気である。本人は自分が好かれていることを充分承知しているようだが、決してそのことで奢ったりはしない。だからこそ僕はこいつとなら仲良くしてもいいかなと思えたのだと思う。「いや、ちよつと風呂場で頭を打って少し入院していたんだ」

僕がそう言うのとツトムは最初怪訝そうな顔をした。だが、すぐ後に急に大声で笑い出した。そこでようやく僕は間違ったことを口にしてしまったと後悔の念にさいなまれた。ツトムの性格を考えれば、この滑稽話が学校中に広まるのは当然であった。こいつは人一倍口が軽いのだ。

「お前、それほんとかよ！うそだろ！ははは！」

普通の人ならばそんなばかげた話は信じないかもしれない。でも、ツトムは僕がツトムに対してはある程度心を開いており、そのようになしうもないウソをつくことはないことをよく知っているのだ。だいたいウソにしてはあまりにもウソらしすぎる。けれども僕は平静を装うことにした。ここで僕が取り乱してもしたらさらに悲惨なことになる。僕はツトムに向かって何が面白いのか全く分からないというような表情をしてみせた。ツトムはそれでも笑い続けていたが、しばらくするとその笑いは次第に収まっていった。どうやら僕の作戦は成功したみたいであった。

一限目の授業が始まると、クラスの生徒が一斉にスクデの電源スイッチを入れ、教室中に機械の起動音が響いた。一限目は日本史であったが、僕は歴史が嫌いだったので話半分に教師の言うことを聞

き流し、窓の外を眺めていた。一年生の校舎が見える。みんなきつちりと椅子に座って前を向き教師に耳を傾けているように僕には見えなかった。後ろのほうの席にはスクデにうつ伏せになっている奴もいたが、それはごく少数で、やはり生徒全員が教室前方を見ていた。僕はそのときなんだか奇妙な感じがした。どうしてこんなに味気ない授業を愚鈍に聞くことができるのだろう。教室の前方に取り付けられた巨大スクリーンに授業内容が映し出され、教師がマウスポインターを使って説明を加えながら教壇を歩き回る。巨大スクリーンに映し出されている画像、文字、映像はスクデでも自由にすることができ、メモアプリケーションを同時に起動しておけばノートも取ることができる。だけでも今時ノートを取る奴なんていない。授業で使われる画像、文字データは好きなように保存できるし、スクデから校内のデータベースに転送しておけば、たとえ変更（例えば画像データに書き込みをしたり、文字データに下線や色をつけたりして後から見たときに見やすくする）したデータであつても自宅のパソコンで閲覧することができると。詰まるところ教師の弁舌というものはすでに意味をなくしてしまっているのだ。このことに気づいた僕はそれ以来教師の言葉を耳に入れることをやめた。

そして、ツトムも僕と同じように教師の話など一切聞いていないと言っている。あいつは授業中に何をやっているかというところ、オンラインゲームをスクデを使ってやっている。かなりの勇者だ。なぜなら、スクデのトップ画面は教師のスクデにリンクされており、ネットゲームで遊んでいることがバレてしまうのだ。僕にはそんな危ない橋を渡る勇氣はなかった。確かに授業は退屈極まりなかった。僕は授業の退屈さ加減がある一定の範囲を超えると決まって窓の外を見た。外は自由に満ち溢れているように感じられた。しかしそれもつかの間の夢想で、少し視点をずらすと、教室の窓ガラスのキズが明瞭になって立ち現れ、僕は教室の中へ引きずり戻される。仕方ないので僕は一年生校舎で見かけた男子生徒のようにつつ伏せになつて居眠りをすることにした。

気づくと一限目は終わっており、休み時間になっていた。デスクトップの右端に出ている時間割を確認してみると二限目は英語だった。英語だけは僕の好きな教科であった。イギリス人のトニーと教師との英会話のやり取りを見ているのは実際面白かったし、何か高尚な劇を鑑賞している気分になれた。といつても僕は英語の成績がそんなによかったわけではない。学年の中での位置は中の下ぐらいであつたし、きれいな英語が話せるとか、リスニングができるとか、そういう能力はなかった。けれども、英語独特の響きとか、何を話しているかは分からないけど、目の前では確かに何らかの情報がやり取りされているのを感じることができたし、それは僕の好奇心を駆り立てた。この前読んだ校内新聞に生徒の好きな教科アンケート集計結果が載っていたので気になって読んでみたのだが、なんと英語は最下位で全校生徒の2パーセントしか好きな教科として選んでいなかった。これは僕にとって悲しい知らせであつたが、どうせまともにアンケートなんて取っていないに決まってると自分に言い聞かせてその新聞はゴミ箱に投げ捨てた。

そうこうしているうちに二限目開始のチャイムが鳴り響いた。教室にいた生徒たちはそそくさと自分の席に着いた。僕は英語の授業で使用されるアプリケーションを起動した。

「Hello every one! How are you today?」

軽快な声の持ち主がやってきた。英語教師の河田だ。いつも青チエックの半袖シャツを着ていて、決まって第一ボタンまで閉めている。ネクタイをしていないのに第一ボタンまで閉める必要があるのだろうか。そもそも首下が苦しかったらクールビズにならないのではないかといつも思うのだが、当の本人はどうやら気にしていないらしい。

河田は教壇の前に立つと英語のアプリケーションソフトを立ち上げるように生徒を促した。今日はトニーが来ていない。僕は少々落胆した。通常の英語の授業はあまり面白くないのだ。まず、授業の

始めに今日学ぶ会話表現を一通りチェックし、その後実際にその表現が使われる場面の映像が流れる。それも毎回同じ外国人が登場するのだ。思うに、これがこの授業をつまらなくしている諸悪の根源である。授業のスキットが変わることに登場人物がまるつきり変わってくればいつも新鮮な気持ち、態度で臨めるというものだ。そんなの誰が考えたって分かる。けれども制作費を削減するためなのか、文部科学省の策略なのか何なのか分からないが登場人物は必ずトムとキャサリンなのだ。百歩譲って登場人物が同じであることは教育上メリットがあると信じよう。だが、キャスティングだけは文句を言わせてくれ。トムは端正な顔立ちで金髪、手足もすらりと長くとてもハンサムだ。だけどどうだ、あのキャサリンの不細工さ加減は。顔はそばかすだらけだし、腰周りや二の腕には余計な贅肉が美しく蓄えられている。髪の毛も本当に美容師にカットしてもらったのか疑いの目を向けずにはいられないのだが、まともというものが一切ない。あれは寝起きと勘違いされても全くおかしくない。散々キャサリンの悪口を並べてきたが、この二人のキャスティングで僕が最も我慢ならない点は二人の年齢差だ。どう良心的に見積もってもキャサリンは四十代前半である。トムはおそらく学生だ。つまり20歳前後、二人の年は離れていることになる。それにもかかわらず二人は互いにボーイフレンドとガールフレンドなのだ。僕は二人がキスするところを想像するだけで吐き気がする。一体トムは何をとち狂ったのだろうか。あれだけハンサムだったら絶対もつと美人なガールフレンドでなければおかしい。あまりにも不釣り合いすぎる。そんな滑稽な二人をめぐる様々な物語が英語の教材には使用されている。ほんとばかげた話だ。

どうやら本日はトムとキャサリンと一緒に映画を観に行くようだ。スクデ上に映像が流れ始めた。トムが駅前で腕組をしながら一定のリズムで地面を踏み刻んでいる。キャサリンが約束の時間に遅れているようだ。数秒後、キャサリンが登場した。トムに必死で謝罪をしている。画面下方には会話の字幕が出ている。どうやら電車が人

身事故の影響で遅れたらしい。英語の教材に人身事故を登場させるのはどうかとも思ったが、都会においては日常茶飯事の出来事であるし、逆にリアリティがあつていいのかも思った。一通り、キャサリンの言い訳が終わると、トムはにこつと笑つて、何事もなかつたかのように映画を観に行こうと言い始めた。英国紳士とはこの人のことを言うのだろうと僕は妙に感心した。僕だったら、少し愚痴にも似た一種の嫌味をペツと吐き出してしまつたらう。世界中の男たちがみんなトムみたいな紳士であつたら戦争なんて起きるはずがなく、裁判もいらなだらう。みんな笑つて、「It's all right. Let's go to the theatre.」とか言つて映画を観に行くんだ。全員が全員笑つて過ごしている世界をちよつと想像してみたが、それはそれで恐ろしい世界だなと思つた。

昼休み、僕はツトムと一緒に教室で昼食を食べた。僕は今朝母親に作ってもらつた弁当をスクデの上に置いた。僕はいつも母親に弁当を作ってもらつている。母は専業主婦で料理に関してはほとんどプロだった。学生時代料理研究サークルに所属していたらしく常日頃新しい料理について考え、レパートリーを増やすことに快感を覚えていたらしい。一方ツトムは毎朝学校近くにあるコンビニでサンドイッチを買つてくるのが日課であつた。だいたいいつもカツサンドとベーコンエッグサンドを持ってきており飲み物はその日の気分で飲みたいものを買つていた。中でも炭酸飲料が好きで、新商品が出るのと飲んでみないと気がすまない性らしく、新しいのが出るたびに必ず購入して学校に持つてきていたのであつた。

弁当箱を開けてみると、左側半分は僕の大好きなそばろご飯になつていた。早速そばろご飯に手をつけるとツトムが話しかけてきた。「にしてもお前つてそんなにドジだつたつ。風呂場で転ぶとか幼稚園児でも聞いたことないぜ」

僕は少しむつとしたが、反論するだけの力がわいてこなかつた。

「おれだつて信じられないよ。今まで生きてきて初めてだよ」

ツトムはやっぱり笑い始めた。

「変なことがあるもんだな。でも、生きててよかったな」

「そうだね。こんなことで死んじゃったら悔やんでも悔やみきれん」  
そう言っつて僕はそぼろご飯をもう一口分口元へと運んだ。やはりうまい。そぼろの味付けが絶妙だ。しょうゆと砂糖の按配が丁度いい。甘すぎず辛すぎずかといつて味が薄いわけではなく白いご飯とよく合う。退屈な授業を4時間ぶっ続けで受けた後の至福の時間だ。僕はあつという間にそぼろご飯を平らげてしまった。

午後の授業は相変わらず退屈なものだった。授業内容は着実に進んではいるのだが、本質は何も変わっていやしない。教師は定められたカリキュラムをこなし、生徒も定められた形式にのっとりて学校生活を送る。ただそれだけ。テストの点が前回よりも上回っていれば教師も喜ぶし生徒も喜ぶ。お気楽なものさ。かといつて勉強することに對して反抗してみたところで何も解決しない。僕の学校にも登校拒否の子やいわゆる不良少年とといった人たちは存在する。僕に言わせてみればそういう奴らは落ちこぼれさ。自分で自分の首を絞めているのにも気づかず、苦しい苦しいと言いながら水面で金魚みたいに口をパクパクさせて必死で空気を吸い込もうとするのに全然楽になりやしない。そうして、さらに奥深くに沈み込んでしまふ。周りの人々がいくらその種の人々に救いの手を差し伸べたところであいつらは掴みやしない。自分たちが正しいと思ってるんだ。だから平気で救いの手を跳ね除けて非行に走ることができるんだ。僕は絶対にあつち側へは行かない。まだこつち側にいるほうがましさ。だから僕はこうやって教室の椅子に文句一つ言わずおとなしく座っているんだ。これが一番安全で一番安心な行動なのだ。そして教師の話の聞いている振りをして頭の中では別のことを考える。こつちでもないと言っつてられないのだ。僕が空想に耽っている間、教師の声がまるで無人トンネルの中で叫んだ声みたいに脳内でこだまし、トンネルの奥へと消えていった。

放課後、僕は今日一日分の授業データを保存し、共有データベ

スに転送した。デスクトップの左下にあるスタートアイコンをタッチすると最近開いたフォルダの欄に一つだけ聞き慣れないフォルダがあった。フォルダ名は”s a k i”。僕はこんなフォルダを開いた覚えはないのだが、気になったので開いてみることにした。

パスワードを入力してください

スクリーンの中心にこのようなタブが現れた。もちろん僕はパスワードなど知らない。そもそも”s a k i”というフォルダすら今初めて見つけたのだ。僕はツトムがいたずらか何かだろうと思い、そのときは特に気にすることもなく電源を切った。

自宅について、僕は真つ先に自分の部屋に向かいパソコンの電源をつけた。数秒後、デスクトップ画面が出てきた。スタートアイコンを押すと学校のスクデと同じく最近開いたフォルダの欄に”s a k i”というフォルダがあった。ダブルクリックしてみたがやはりパスワードを求められる。僕は自分の生年月日、好きな食べ物、自分の名前、クラスの出席番号など思いつく限りの答えを入力したが一つとして合致するものはなかった。

僕はあきらめてベッドに横になった。しばらくぼんやりと考えもせず、思いもせず、時間だけが過ぎていったが、突如一つの回答が浮かんだ。

「風呂場で頭ぶつけたときに忘れちゃったんじゃ……」

それは最も正解の可能性が高い回答であった。世間一般でいうところのど忘れみたいなものだ。ど忘れよりももしかするとたちが悪いかもれない。自分がフォルダを作ったことと、作った際に設定したはずのパスワードを忘れてしまったのだ。だが、冷静に客観的に分析してみたところ、この”s a k i”というフォルダには大事なものが入っているように感じられなかった。むしろ何かいやらしいもの、そう、例えばせつせと集めた性欲を掻き立てるような画像が大量に入っているように思われた。その考えに至ると僕はコン

ピーターの電源を消して夕飯を食べに食卓へと向かった。

その晩、僕は不思議な夢を見た。ふと気づくと僕は四方八方が透明な鏡でできた立方体の部屋の真ん中に立っていた。目の前の鏡に映った僕がゆつくりと左へ言ったり右へ行ったりしながら悩んでいるように見えた。右手で顎の辺りをさすりながら首をほんの少しかじげて歩いている。

「なあ、コウタ。お前何か大切なモノを忘れちゃったんじゃないか」  
前方の鏡に映った僕が僕に向かって尋ねた。

「大切なモノ？」

「そう、大切なモノ。お前心当たりはないか」

「いや、・・・・・・・・思い出せない」

「思い出せよ！」

鏡の中の僕が怒鳴った。

「ごめん、つい感情的になっちゃった。悪いな・・・・・・・・どここれはオレだけの問題じゃないんだぜ。オレの問題はオレの問題であると同時にお前の問題でもあるんだ。分かるか？」

「なんとなく」

「とにかく、お前は何か重大なモノを忘れちゃってる。これだけは間違いない。なぜならオレが忘れちゃったことを知っているからだ」  
そう言うと、また鏡の中の僕は歩き出した。

「だけど、そんなこと言われても分からないよ。一体何を忘れたと  
いうのさ」

「だからそれを探せって言ってんだよ！分かんなくても関係ねえ！」  
鏡の中の僕がまた怒鳴った。すると鏡たちにヒビが入り始め、次の瞬間には音を立てて崩れ落ち・・・・・・・・。

ジリリリリリリ

僕は目覚まし時計の頭を叩き鳴き止ませた。時計の針を寝ぼけ眼

で確認すると午前七時であった。少し頭痛がする。ベッドからむくりと起き上がり、後頭部をポリポリと搔いた。

「いてっ！」

すっかり忘れていた。頭の右後ろには風呂場で転んだ古傷があるのであった。寝起き一番嫌な思いをしてしまった。何だか今日は悪い一日になりそうだ。何か夢を見た気がしたが、その映像はあまりにもおぼろげで蜃気楼のように実体がなく、夢を見たかどうかもよく分からなかった。ただただ気分が悪いだけであった。

教室に到着すると昨日とは打って変わって生徒の数は四、五人で教室内は閑散としていた。ツトムもまだ来ていないみたいだった。

僕は自分の座席に座り、電源スイッチを入れた。画面が明るくなり、スクリーン上には教科別のアプリケーションが映し出された。何気なくスタートボタンにタッチしてみた。最近開いたフォルダ欄に視線を移したのだが、昨日そこにあっただはずのフォルダが消えてなくなっている。あれ、確かにここに何かのフォルダがあったはずだ。何故ないのだ。おかしい。しかし、そんな自分も知らないフォルダが自分専用のスクリーンデスク内に存在している方がおかしい気もしてきた。でも、昨日はあった。これは間違いない。くそっ、思い出せない。一体、最近開いたフォルダ欄には何があったのだ。

「よおコウタ。本当にそのタンコブ痛そうだな」

ツトムが登校してきた。いつものあの爽やかな笑顔だ。この顔を見ると僕もついつい頬の筋肉がゆるんでしまう。ツトムには人の心の扉を開かせる力が生まれつき備わっているように思われる。ツトムは僕のタンコブを触ってもいいかと聞いてきたのだがとんでもない。軽く触れるだけでも激痛が走るのだ。他人に触られるのを想像するだけで右後頭部がうずいてきた。僕は何も憂うべきものがなさそうなツトムをうらやましく感じた。

一限目が始まった。国語の授業である。今日の教材は太宰治の人間失格であった。題名からして失格である。どこの官僚がこんなものを高校の教科書に載せることを提案したんだ、全く。

教壇に立つた国語教師は淡々と太宰治の生い立ちについて語り始めたのだが、僕は太宰に対してものすごく申し訳ない気持ちになつた。何度も入水自殺を図つたことで有名であると死んでから見ず知らずの他人に言われ、仕舞いには頭が狂つていたとまで言われたりもするのだ。そんなことを冗談半分に笑いながら語られるなんて怖くてしょうがない。一体誰が入水自殺を図りたくて入水自殺を図るというのだ。一体どこのどいつが頭をとち狂わせたいと思つてとち狂うというのだ。みんな健康で幸せでいたいに決まつてる。そうじゃなかったらこの世界がとち狂つているのだ。僕は国語教師の話を聞いているうちに頭が痛くなつてきてしまった。またもヤタンコブが疼き始めたのだらうか。僕はいつものように窓の外を見た。空には雲ひとつない。青だ。おそらくこの空の色を原始人は青と名づけたのだ。僕はそう思った。しばらく空を眺めていると段々と眠たくなつてきた。僕はいつも通りスクデに突つ伏して寝ることにした。

三限目は体育だった。男子は校庭でサッカー、女子は体育館でバスケをすることになっていた。僕は運動神経がいいほうではなかったが、かといって悪くはなかった。ツトムはもちろんサッカーがうまい。現にサッカー部に所属しているし、どこから見てもサッカー少年であつた。ふくらはぎの筋肉がほかの男子に比べて異様に太い。適当に準備体操をした後、出席番号順にチーム分けがなされた。僕はツトムと同じチームになった。ツトムはサッカー部ということもあつて、すぐさまチームのキャプテンに決定された。

「コウタはもちろんディフェンスだよな。で、オレはオフENS。ほかのみんなは適当にコート内に散らばってくれ。ボールに固まり過ぎないようにな。初心者はみんなボールに寄つていつてしまふから」

ツトムは本当に僕のことをよく分かっている。僕は絶対にディフェンスなのだ。そしてツトムはオフENS。僕は左サイドバックに自然となった。試合開始の笛を体育教師が思い切り吹き鳴らす。味方チームの奴がツトムへとボールを渡す。ツトムはボールを受け取

るや否や、猛ダッシュで相手ディフェンスをかわして行く。味方チームも相手チームも呆気にとられて全くツトムに追いつけない。それどころか、よく見てみると、誰一人として追いかけてすらいない。たちまち、ツトムは相手ゴール前まで到達してした。相手ゴールキーパーは素人だったのでツトムの気迫に押されて背を向け、しゃがみ込んでしまっていた。校庭中で大爆笑が沸き起こった。これには僕も思わず笑ってしまった。ツトムはキーパーの前で立ち止まるとボールをインサイドでやさしく転がした。キーパーは依然として背を向けてしゃがみ込んだままだ。ボールにはキーパーのすぐ隣をゆつくりと転がっていく。……ゴール。ツトムが右手を天高くかかげて走ってくる。

「どうですコウタさん！歴史的ゴールでしょう！」

僕は走ってくるツトムが一人だけ宙に浮いているように見えた。

昼休み、僕とツトムは昨日と同じく教室で昼食をとった。僕は相変わらず母親の手作り弁当。ところが今日はいつものスケデ上の風景とはちよつと違った。ツトムの買ってきた飲み物がお茶なのだ。それも緑茶。

「ツトム、お茶なんて今までに持ってきたことあつたっけ」

「いや、初めてだよ」

「何でよりによって緑茶を選んだわけ」

「たまにいつもと違うことがやりたくなる時があるだろ。たまたまそれが今朝コンビニで飲み物を選んだときにやって来たんだよ」

僕はツトムの台詞に納得してしまった。確かにそういうときは少なからず誰にでもある。いつも同じことをやっているとか次第に飽きてきてしまう。気分転換というやつだったのだろう。僕は弁当に入っていた玉子焼きを箸でつまんだ。うむ、丁度いい硬さだ。いい玉子焼きというのは食べる前に箸でつまんだ瞬間に分かる。そこでもやはり、僕は母の料理の才能には感服させられたのだった。

放課後がまたやって来た。僕はツトムとしばらく教室に残ってオンラインゲームをすることにした。ツトムは僕の前の席に座り、ス

クリーンデスクを起動した。ツトムと二人で放課後にオンラインゲームをするのはこれで何回目だろうか。はつきりとは思いつけないが、軽く五十は超えている気がする。二人でゲーム内の村で待ち合わせをして悪いモンスターを倒しに行く。モンスターを倒すとゴールドとアイテムが手に入り、さらに凶悪なモンスターと戦うことができるようになる。どうしてモンスターがお金を持っているのかは分からないが、とにかく、モンスターを倒すとお金が手に入るのだ。そして、そのお金を使ってさらに強力な武器、強固な防護服を手に入れることができる。

「なあ、コウタ。暇じゃないか」

「ああ、暇だよ」

ツトムはそんなことを言いながら、巨悪なモンスターに着実にダメージを蓄積していった。僕は遠くの安全な場所から狙撃銃を使ってモンスターに狙いを定め、ツトムがやられそうなときに電撃銃を発射してモンスターをひるませる。そして、その隙にツトムはモンスターの背後へ回りこんで太刀で背中を切りつける。二人の息はいつもぴったりであった。どんなに強力なモンスターが出てきてもツトムと一緒にいれば必ず倒せる自信があった。そうこうしているうちにモンスターの体力が底をつき、僕とツトムは合計五千ゴールドと七色に輝く爪を手に入れた。僕は特にこのゲームを極めようと思っっているわけではなかった。それで全てツトムに譲ることにした。ツトムは非常に喜んでいたが、少々申し訳なさそうにもしていた。

その晩、僕はまた夢を見た。昨日の晩と全く同じ夢だった。

「おい、忘れモノは見つかったか」

「いや、見つからない」

「探せって言っただろ！」

「ごめん」

「全く。探そうとしなけりゃ見つかるわけがないだろ」

「すまない。分かつてはいるんだけど、八方塞なんだ」

「そうか。でもお前、何かを忘れてのことだけは忘れちゃいけないぜ」

「忘れてることすら忘れかけてる」

「何だと！今すぐ思い出せ！何かを忘れてることを思い出せ！」

「分かったよ。思い出すよ、ごめん」

「そうだ。それでいいんだ。とりあえずはその方向で行こう」

そう言うとき鏡の中の僕は奥のほうへ歩いていった。僕はひどく虚しい気持ちになった。

朝が来た。窓の隙間からスズメの鳴き声が聞こえてきた。時刻は六時十五分であった。僕は起きてから今日が土曜日であることに気がついた。そういえば今日の十一時に彼女と駅前で待ち合わせて、一緒に遊園地に行く約束をしていたな。僕は危うく約束を破ってしまったところだった。二度寝をしようかと思ったが、どうも眠れそうにない。仕方がないので起きて準備をすることにした。タンズからお気に入りのプリントTシャツとチノパンを取り出した。下着も右上の小さな引き出しから取り出し、それら一式を持ってお風呂場へと向かった。シャワーを浴びようと思ったのだ。階段を下りて廊下を進むと脱衣所が見えてきた。父と母はまだ寝室で眠っているのだろう。家の中はいやに静けさに包まれていた。脱衣所に着くと僕はアデイダスのジャージと下着を脱ぎ、浴室の扉を開けて中に入った。浴室の向かい側には大きな鏡があった。僕の裸体が鏡の中に映り込む。一步一步鏡に近づくとつれ僕の姿は大きくなる。鏡の前に置いてある椅子に座ると僕の顔が映った。どこかで見たことのある顔だ。にこつと笑ってみた。すると、鏡の中の僕もにこつと笑った。僕は何か安心した。鏡の中に写った僕が、僕の意に反して動き出すような気がしたのだ。どうしてそんなふうにしたのかはさっぱり分からないのだが、勝手に動き出すような気がしたのだ。

僕はシャワーを浴び終わると、朝起きたときに選んだプリントTシャツとチノパンを着た。そして、ドライヤーのスイッチを入れて、髪の毛を乾かした。二階の自分の部屋に戻る途中、両親の寝室をのぞいて見たが父も母もまだ起きていなかった。自室に戻ってみると時計の針が六時四十五分を指し示していた。

「まだ十一時まで四時間以上もあるな」

僕はどうやって暇をつぶそうかと考えた。とりあえず、昨日ツトムと一緒に遊んだオンラインゲームをして約束の時間まで過ごすことにした。

駅前は思ったよりも空いていた。僕が到着したのは約束よりも二十分早い十時四十分であった。今、時刻は十一時五分。早希が約束の時間より早く来たことは今まで一度もなかったため、僕は待たされるという状況に慣れていた。

「ごめんごめん、人身事故で電車が遅れちゃって」

僕はそういう起きうるあらゆるトラブルを予め考えて、二十分前には到着できるように行動しているんだ、早希、君はそういうふうを考えて行動することはできないのかいって言ってやりたかったが、そんなことを言ってしまうと今日一日が台無しになる気がしたので、僕は言葉を喉の奥に押し込んだ。

「いや、大丈夫だよ。さて、行こうか」

僕と早希は楽後園に向かって歩き始めた。駅前から楽後園までは距離にしておよそ二百メートルほどである。僕の学校では定番のデートスポットになっている。初デートは楽後園に行っておけばとりあえずは大丈夫だってみんなが口を合わせていうもんだから、校内のカップルは特に行きたい場所が思いつかないとき、決まって楽後園に来るんだ。園内を歩けば三十分には必ず宇都後高校のカップルに出くわす。みんな他に遊びに行くところはないのかと言いたくなるが、事実僕自身も楽後園に来ているわけで、そんなことを言う権利はなかった。

そうこうしているうちに僕たち二人は楽後園に到着した。チケッ

ト売り場で二枚入場券を購入し園内へと入った。

「まずはあれに乗りたい」

早希は入園してすぐにあるアトラクションを指差してそう言った。人差し指の先を確認するとそこにはメリーゴーランドがあった。高年生にもなつて小学生や幼稚園児が戯れているメリーゴーランドに乗るのは多少気が引けたのだが、早希の機嫌を損ねるとろくなことにならないのを知っていた僕は、しぶしぶ早希の願いを了解した。係員の前を通るときに係員の視線が冷たく感じられたのだが、早希は全然そのことに気づいていないようだった。早希は大きなカボチャの馬車に乗り込んだ。

「コウタも一緒に乗ろうよ」

そんなことを言われなくても、僕は同じ馬車に乗るに決まっているじゃないか。僕は小さく頷いて、早希の向かい側に座った。

「あれっ、もしかしてこのカボチャって上下しないのかな」

早希は少し不安に思っただらしく周りをきよるきよると見始めた。ほどなくしてメリーゴーランドは回転を始めた。

「上下しないね」

僕は一言そう言った。早希はカボチャの馬車が上下に動かないことをとても残念に思っただらしく、次メリーゴーランドに乗るときには絶対にカボチャにだけは乗らないと語気を荒げて僕に宣言した。僕はカボチャの中から回転する景色を眺めた。そういえばこの前メリーゴーランドに乗ったのはいつだっただろうか。小学校の低学年時に両親がこの楽後園に僕を連れて来てくれた気がするのだが、はつきりとは思いつけない。僕が思い悩んでいると、ビビディ・バビディ・ブーの合間から早希の声が聞こえてきた。

「もしかして乗りたくなかった？」

僕は一瞬どきつとしたが、大きく首を振った。これ以上早希の気を悪くするわけにはいかない。とても楽しいよとぼくはウソをついてこつと笑った。

メリーゴーランドから降りると、早希はすぐさま次の目的地を見

つけたようで、歩き出した。少し後ろから僕がついていく。突き当りを左へ折れると目的地が見えた。お化け屋敷だ。看板には赤い文字で”血塗られた学校。君はこの学校の恐ろしい七不思議に耐えられるか!?”と書いてある。なるほどお化け屋敷の外観は学校の校舎にそっくりだ。窓ガラスはほとんど割られており、壁には無数の落書きがそこかしこに描かれている。二階よりも高いところにも落書きがあつたが僕はあんな高いところに人間が落書きできるのかと少し疑問に思つた。

「絶対怖いわよ、これ」

早希は楽しそうにそう言った。早希は僕の手を掴むと入り口から校舎の中へと入った。中に入るとそこは完全に別世界であつた。下駄箱にはボロボロになつた靴が入っていたり、血が至るところに飛び散っていたり、生首がそこら辺に転がっていたりした。BGMにはベートーベンのエリーゼのためにが流れていた。早希はどうやら結構怖がつているみたいで僕の腕を掴んでいた手のひらから汗がにじみ出てきているのが分かつた。早希は怖がつていると思われるのが嫌みたいで、思ったより平気だとか、生首の作りが雑だとか色々しゃべっていたが、僕にはそれが強がりだということがよく分かつていた。

外に出ると早希はお腹が空いたと言い始めた。携帯で時間を見てみると十二時十分であつた。僕もかなりお腹が空いたので昼食をとることにした。園内にあるフードコーナーに入つて席を取り、僕は早希に何が食べたいか聞いた。

「カルボナーラが食べたい。ドリンクはコーラでいいわ」

僕は早希から注文を受けるとカウンターに行き、天ぷらうどんとカルボナーラとコーラを二つ頼んだ。数分後、注文した食べ物とコーラがお盆に載つて出てきた。それを持って、早希の待つている席へと向かつた。早希は腕と足を両方組んでいた。何やら不機嫌そうな表情を浮かべている。

「遅いわよ」

そう言われても僕にはどうしようもなかった。実際僕は今回やるべきことを全てスムーズにこなしたし、もし遅くなったことに責任があるとするれば店員の手際の悪さしか考えられなかった。早希はお化け屋敷が相当怖かったみたいで疲れているようにも見えた。

「結局さあ、あの学校の七不思議ってなんだったと思う？」

早希はカルボナーラの麺をフォークでくるくる巻き取りながら僕に尋ねた。

「どうだろう。まず設定がよく分からなかったから何とも言えないな」

「私は、あの学校に七不思議なんてもともとなかったと思う」

「どういうこと？」

「学校が普通に機能していたときには何も怖い事件なんて起きていなかったんじゃないかってこと」

「ふむ」

「ところがある日突然廃校になっちゃった」

早希はフォークに巻き取ったカルボナーラを大きな口の中へと放り込んだ。

「どうして廃校になっちゃったの？」

「誰かが噂を流したのよ」

「噂？」

「そう、噂。きつと噂を流した生徒はとても頭がよかったのね。本当に現実にもありえそうな噂を流したのよ」

僕は天ぶらを箸でつまんで食べた。汁に浸しすぎてしまったように衣がふにやふにやになっちゃってしまっていた。

「最初は誰もその噂を信じていなかったのよ。でもね、あるときその噂の一つが本当に起きてしまったのよ」

「それは面白そうな話だね。もっと聞かせて」

「女の子が自殺したのよ。飛び下り自殺」

僕はコーラを一口飲んだ。炭酸が喉の奥で鳴っている。

「その事件以来、誰かが流した七つの噂は学校の七不思議として語

り継がれるようになった」

「なるほど。それはありえそうな話だ。だけど、どうして急に廃校になったんだい？」

「知らないわよ、そんなこと」

早希は僕の質問を真つ向から跳ね除けた。僕は思わず笑ってしまった。早希は僕が笑ったことに対して怒りを覚えたみたいで、早く外に遊びに行こうと急かした。僕は急いで天ぷらうどんを平らげると早希の食べ終わった食器を自分のお盆に載せて、返却口へと運んだ。

夕方になった。僕と早希は遊び疲れてベンチに座っていた。子供連れや、若いカップルが何組も通り過ぎて行った。閉園時間まで残り三十分だった。僕がぼんやりと空に浮かんでいる雲を眺めていると早希がもう一度お化け屋敷に行こうと言いだした。僕自身はもう帰りたい気分だったのだが、薄暗くなつてからお化け屋敷に行くのも悪くないなと思い、その誘いにのつた。それにあの学校の七不思議も一体何であったのか確かめたかったという気持ちもあった。

お化け屋敷に入るとやはりどこか異空間に來たような気持ちがあった。相変わらず早希は僕の腕をつかんでしきりに校舎内にあるものがあまりリアルではないとしゃべり続けている。しばらく校舎内を進むと目の前に階段が出てきた。はて、昼間お化け屋敷に入ったときは階段などあっただろうか。僕は奇妙な感覚に囚われた。しかし、階段を上る以外の道がない。早希は気にしていないみたいで、早く進みましょうと言いつつ続けている。不思議に思いつつも階段を上り始めた僕はさらに奇妙な出来事を経験した。今まで校内に流れていたエリーゼのためにが急に鳴り止んだのだ。早希もそのことに気づいたみたいで怖いと言って僕に抱きついた。僕らはそのとき階段の踊り場にいた。普通なら僕も一緒に怖がらなければいけないところなのだが、何故かそのとき僕は満たされた気持ちになった。薄暗い階段の踊り場で僕に抱きつく早希の頭をなでていると、泣き声が聞こえてきた。その泣き声の主は早希だった。僕は何も言わず、もう

一度早希を強く抱き寄せた。もう歩きたくないと早希は言ったので僕ら二人は踊り場で係りの人が来るのを待った。係りの人が来るまで、僕ら二人はずっと抱き合っていた。

その晩、また夢の続きが始まった。僕はやはり透明な鏡で四方八方を囲まれた部屋の中で立ち尽くしていた。ところが今回は今までの夢とは違う。鏡に僕の姿が映っていない。鏡の中の僕はどこに行ってしまったのだ。呼びかけてみても返事がない。僕は今までにならぬ孤独感を味わった。それは、とても悲しく、とても侘しく、とても虚しい感情であった。

「どうしたんだよ」

ツトムが僕に声をかけてきた。僕の顔色が悪いと言ってる。確かに今日の朝、目覚めは非常に悪かった。そのせいで朝の準備に手間取って、いつもよりも十五分遅れで家を出たのだ。そして、電車に乗った。ところが、乗ってから二駅目と三駅目の間を走っていると急に突然電車が減速し始めた。そして、最終的には止まってしまった。人身事故の影響で遅れが出ていると車内アナウンスが流れた。その人身事故のせいで僕は学校に遅刻してしまった。別に遅刻に関して教師に叱られるはしなかったが、それでも何となく気分は悪かった。ツトムはそんな僕の心境を顔色を見ただけで理解したのだろう。本当にすごいやつだ。ツトムはそんな僕を見かねてか今日の放課後一緒にオンラインゲームをやるうと言い出した。ツトムによるとそのオンラインゲームはモンスターを狩に行つて、ゴールドやアイテムを収集し、さらに経験値を蓄えてもつと凶悪なモンスターを倒しに行くというものだった。ツトムは自宅で毎日そのオンラインゲームをやっているらしく、全国各地にゲーム仲間がいるらしい。話を聞いているうちに僕もそのゲームを一度やってみたくなったので、

放課後、スクデでツトムと一緒に協力プレーをすることにした。

放課後、ツトムは僕の座席に座り、オンラインゲームをスクデにダウンロードした。そして、僕の前のスクデにも同じようにダウンロードし、その席にツトムは座った。僕は早速IDとパスワードを登録して、プレイしてみた。一番最初にプレイヤーは村に出る。ツトムがすでに村の中央広場で僕を待っていてくれた。ツトムの格好はとてもスタイリッシュであった。おそらくドラゴンの皮か何かで作られた半透明な青色の鎧を身に着けており、背中には大きな刀を背負っていた。僕の姿はぼろい布切れを身にまとっているだけの貧相なものだった。ツトムはまず僕に五千ゴールドを渡すと、武器屋に連れて行ってくれた。僕はそのお金を使って狙撃銃を購入し、防具屋では初心者プレイヤーが必ず買うであろう最もリーズナブルな鉄の鎧を購入し、装備した。ツトムが言うにはモンスターが出てきても近寄らず遠くから狙撃していればゲームオーバーになることはめったにないらしい。その助言通り僕は村を出発した後、ツトムについて行ってモンスターが出現したら必ず草むらにしゃがみ込んで狙撃銃を構えた。モンスターに照準を合わせる間もなくツトムが太刀でモンスターを真っ二つに切り裂いてしまった。ツトムが言うには一緒にパーティーを組んでいるので、ツトムがモンスターを倒しても経験値やゴールドを僕に渡すことができるらしい。僕がツトムと同じくらい強くなるまでモンスターを倒しまくるそうだ。それまでは別に寝ていてもいいということだ。僕は草むらに身を隠したままツトムの成り行きを見守った。

「ちよつと、人のスクデで何やってるの」

教室の後ろの扉に一人の女生徒が立っていた。橘早希だ。ツトムが丁度彼女のスクデを使っている。

「悪い悪い、今取り込み中なんだ。話はもうちよつと後にしてくれるかな」

ツトムはそう言ってまたゲームに熱中し始めた。橘はツカツカと僕らのほうに歩いてきて、今すぐ私のスクデから離れるようにツト

ムに言った。ツトムはこればかりは仕方ないと諦めて、村にいったん戻りゲームデータを保存した。橘はこのクラスの級長であり、拘束にはとても厳しかった。そんな彼女が学校のスクデでオンラインゲームをプレイすることを許すはずがなかった。しかも自分のスクデに勝手にゲームをダウンロードされたものではたまったものではない。彼女はツトムをスクデからどかすと、すぐにオンラインゲームを案インストールした。僕もゲームのデータを保存してスクデの電源を切った。ツトムは帰る準備をし始めたのだが、彼女の様子がどうも怪しい。ちらつと見てみると、うまくアプリケーションが作動してくれないみたいで困っているようだった。僕は多少コンピューター関連の知識には精通していたので、何が原因で不具合が生じているのかはすぐに分かった。

「橘、スタートボタンと電源スイッチを同時に押すんだ。そうすればマルチスクリーンに切り替わるから」

そう言うつと橘は僕の目をキツと睨んだ。  
「じゃあ、直してよ。あなたたちがゲームなんてダウンロードするから変なウイルスに感染してしまったのよ」

橘はそう言いながら席を立ち、僕に直すように頼んだ。いや、頼むという表現は正しくない。命令したと言ったほうがいいかもしれない。僕はマルチスクリーンに切り替えて、いくつかアプリケーションを閉じた。すると僕の予想通り、画面に表示されていたエラーメッセージが消えた。橘は少し驚いたような顔をしたが、直ったことに安心したようで笑みがこぼれた。僕はそのとき初めて橘が笑うところを見たような気がした。

話を聞いてみるとどうやら学校祭関係の書類作成に追われているらしい。データを自分のスクデ内にしか保存しておらず、もしこのままスクデが故障してしまっただらどうしようかと不安になっていたようだ。僕はせっかくだからデータを校内のデータベースに転送してあげることにした。そうすれば自宅でもデータを見ることができるとし、たとえスクデ内のデータが損傷しても、大元のデータが破損

しなければ大丈夫だということも伝えた。橘はそういったことに關して全くと言っていいほど興味がなく、そのため知識もほとんどないらしい。彼女はデータを自宅でも自由に引き出せるという事実を知りとても喜んでいた。そして、今週末、自分の家に来てどうやって学校のデータベースから自宅のパソコンにデータを転送するのか教えてほしいと言い出した。僕自身も今週末には何も予定が入っていなかったため、その要求を受け入れることにした。

橘の家は僕の家から電車で二駅のところにあった。駅前までわざわざ橘が僕を迎えに来てくれたので迷わず橘宅へ到着することができた。彼女の家を一目見て、僕は彼女の家庭は金銭的に裕福な家庭であろうことが分かった。周りの家よりも敷地が二倍以上あるし、門から入ると玄関まで辿り着くのに十メートル以上歩かなければならない。その道の脇にはたくさん植物が植えられており、色とりどりの花々が咲き誇っていた。玄関に到着し、橘は扉を開けて中に入った。僕も後に続いて入った。

「おじゃまします」

家の中はとても静かで、僕の声に対する返答は返ってこなかった。「今日、ママは仕事なの。私の家、母子家庭だから今は誰も家の中にはいないわ」

そう言っただけで彼女は靴を脱ぎ、向かって右手にある階段を上り始めた。

「こつちよ。私の部屋は二階に上って廊下の突き当たり」

彼女は早足で階段を上り終えるとそのまま行ってしまった。僕はゆっくりとスニーカーの紐をほどいて脱ぎ、きれいに並べた。彼女の靴が散らかっていたのでつい直しておいた。それにしても橘が母子家庭だったとは驚きだ。離婚したのだろうか。母親が土曜日にもかかわらず働きに出かけていること、この大豪邸がどうしても釣り合わなくて何だか僕は少し混乱してしまった。これだけ大きな家に住んでいけば、貯蓄もたくさんありそうなものだが、現実は大層厳しいのかもしれない。そんなことを考えながら、階段を一步一步

上っていると、奥のほうから何やらガタガタと物を片付ける音が聞こえてきた。ドタドタと小走りに走り回る音も一緒に聞こえる。僕は今日来客があることを知っていたんだから掃除くらいしておけよと思ったのだが、もしかすると、今の今まで掃除をする暇もないくらい忙しかったのかもしれないと思い、そのことについてとやかく言うのはやめにした。

騒がしい物音が聞こえてくる橋の部屋の前まで来た僕は扉をノックした。

「もうちょっと待ってて。あと少しで終わるから」

僕はその場に座り込んだ。ふと彼女には姉妹はいるのかどうか気がなった。しかし、土曜日の昼過ぎに自宅には誰もいないということ考えると彼女以外に子供はいそうになかった。真正正銘の母子家庭だ。目の前には長い廊下があり、左手には小さな棚が一つ置いてあった。棚の上には観葉植物と写真たてが置いてある。窓の外から入ってくる太陽の光に照らされて、写真たての影が廊下を半分程度横断していた。写真たてに入っている写真は橋の部屋の前からははっきりとは見えなかった。僕は立ち上がりその写真の詳細を確認しようと廊下を逆戻りした。

写真には小学生ぐらいの橋と、両脇には父親と母親らしき人物が手をつないで立っていた。みんな楽しそうに自然な笑みを浮かべている。背後にはどうやらメリーゴーランドと思わしきものが映り込んでいた。おそらく遊園地かどこかだろう。写真を見ている限り、この家族が離婚するとは到底思えなかった。

「入っていいわよ。待たせちゃってごめんなさい」

ようやく部屋に入ることが許された僕は写真たてを元に戻すと、もう一度扉をノックし中に入った。

「私、掃除するの忘れてて、今さっき部屋に戻ったとき気づいたの。さすがに客を読んでおいて汚い部屋じゃ申し訳ないなと思って、急いで片付けたの」

彼女はそう言って自分のベッドにどすんと座った。彼女の部屋は

僕の部屋より数倍広く、そして綺麗であった。一体今まで何を片付けていたのか分からないくらいだ。部屋は白色で統一されていて、ほとんどの家具は木製であった。中でも目を引いたのは部屋の隅にある本棚で、四段あるのだがその全てが本でぎっしりと埋まっていた。

「あの本は全部読んだの？」

「えっ、ああ、これのこと。もちろん全部読んだわ。っていつても小説ばかりだけどね」

確かによく見てみると小説ばかりであった。それでも読書嫌いの僕にとってはとても信じられないことであった。それに、今時紙の本を持っていること自体が珍しかった。

「私、どうしても電子情報になじめなくてね。パソコンやブックリーダーで文字を読むのが苦手なの。画面を見てると目が疲れちゃって」

僕は彼女の電子化に対する愚痴を聞きながらパソコンの前に座り、電源をつけた。

「電子化された情報って私、大嫌いなもの。なんだか人間味がなくなっちゃう気がする。あなたは社会が電子化を推進することに関してどう思う？」

「別に何とも。理解できれば電子化されていようがいまいが同じだと思っけどな」

「いや、確かにそうなのよ。表面上はね。0と1の二進数に変更されていようがいまいが私たちはそれを理解することはできる。でも、何か引っかかるのよ」

僕は宇都後高校の共有データベースにアクセスした。

「橋のIDとパスワードは？」

「IDが"saki"。パスワードは"prince"」

僕は言われた通りにIDとパスワードを打ち込んだ。

「これでもう大丈夫だよ。いつでも好きなときにデータをダウンロードしたりアップロードできる」

僕がそう言うと、橘は満面の笑みを浮かべてベッドから立ち上がった。

「助かったわ。ありがとう。あのー、せっかく来てもらったし、お礼として何かおごるわ。お昼ご飯まだ食べてないでしょ。近くに私の大好きな洋食屋さんがあるの」

「おごつてもらうなんてとんでもない。こんなこと誰にだってできるよ」

「じゃあ、暇だし、食べに行くだけ行きましようよ」

僕も丁度お腹が空いていたので二つ返事で彼女の誘いを了承した。彼女に連れられて、僕は近所の洋食屋にやって来た。店内に入るとクレーパーがかなり効いており少し寒いくらいに感じた。厨房には店長と思われる男が一人と若い店員が二人いた。そのうちの一人がこちらにやって来て人数を確認すると、僕ら二人を入り口から一番離れた席に案内した。店員はメニューをテーブルに置くと、厨房のほうへ戻っていった。

「私のオススメはオムライス。本当においしいの」

僕はメニューを一通り見て、彼女の提案通り、オムライスを頼むことにした。店員を呼んで、オムライスを二つ注文した。

「家に一人にいるときはいつもここへ食べに来るの」

「自分で料理したりはしないの？」

「たまにする。こう見えても私は料理得意なのよ。料理を作ることが嫌いなだけ」

「僕も自分で料理を作るのは嫌いだよ。面倒臭いし」

「ちよつと違うわね。私は面倒臭いとは思わないもの。むしろ料理を作るのは好きよ」

「じゃあどうしてさっき嫌いって言ったんだよ。早速矛盾してるよ」「そんなこと言ったかしら。とにかく、私は料理を作るのは好きなの。でも、自分のために料理を作ってる姿を想像するのは嫌いなもの」「うむ」

「だから料理を作るとは好きであると同時に嫌いでもあるの」

彼女はそう言うと、店員に水を持ってくるように頼んだ。店員はすっかり忘れていたようで慌ててグラスに入った水を二つ、お盆に載せて運んできた。彼女は水を一口飲むと窓の外に目をやった。僕も同じように窓の外を見てみた。子供たちが歩道を左から右へ歩いていく。車道をときどき車が通った。道路の向かい側には文房具やがあつたが、固くシャッターが下ろされていた。今時文房具など売れないのだ。おそらく潰れてしまったのだろう。僕はシャッターにペンキで描かれている文具店の名前が薄汚れて、もはや文字としての機能を果たしていないように感じられた。文具店という文字はかろうじて視認できるのだが、その前の文字が完全に剥がれ落ちており、電話番号もところどころ番号が抜け落ちていて電話をかけることはできなくなっている。そもそも電話をかけたところで文具店につながるのであるだろうか。それすらも怪しかった。

「お待たせしました。オムライスでございます」

オムライスがやって来た。見た目は普通のオムライスである。卵も別に半熟でもなく、オムライスの山頂から山腹にかけてケチャップがかけてられている。パセリが飾りとして皿の端に置かれていた。僕はスプーンを手に取り、ケチャップを全体にまんべんなく引き伸ばすと、一口分すくって口へと運んだ。……うまい。

「どう？おいしい？」

「なんだか懐かしい味がするね」

「そうでしょ！私もそう思うの！」

彼女は急に喜びの感情をあらわにした。

「私、ここに色んな友達と来たけど誰一人としてこのオムライスをおいしいって言うてくれなかった。みんな口をそろえて普通って言うのよ」

「いや、僕はまだおいしいって言うてないよ」

「あれ、確かに言うてないわね」

「言うてないけど、このオムライスはおいしいよ」

僕はそう言うてもう一口オムライスを食べた。やはり、味は月並

みなのだが、どうしてもか分からないけれど懐かしい感じがするのだ。小さいときにいつも食べていたような気がする。けれど、どうしても思い出せない。しかし、食べると何故か安心するのだ。

「私、このオムライスを食べると安心するの」

「それはよかった」

僕は彼女と気が合う気がした。オムライスを食べ終わると、僕たち二人は店を出て彼女の家に向かった。家の前に着くと、彼女は僕を駅まで送っていかうかと言ったが、僕は一人で大丈夫だと言って彼女を帰した。実際、駅までの道は覚えていたし、もし忘れてしまっても誰かに聞けばいいと思ったのだ。そうして、僕は駅まで一人歩いて帰った。

月曜日が来た。僕は教室へ、いつも通り始業三十分前に到着し、席に座って窓の外を眺めていた。

「おはよう。土曜日はありがとう」

橘が登校してきた。僕に一言礼を言うと僕の前の席に座った。座ってすぐに彼女は上半身だけを後ろ向きにひねらせて、僕の顔を見た。

「高峯くん、小説読んだりするの？」

「全く読まないよ」

僕がそう言うと橘は少し悲しい顔をした。

「そう。それは残念だね」

彼女はそう言って前に向き直った。僕は後ろから彼女の後頭部を見つめた。朝日が窓から差し込んで彼女の黒い髪に少しだけ反射している。髪の毛は痛んでいる様子がなく、綺麗に整っている。いつも手入れをしっかりとっているのだろう。僕のボサボサの髪とは大違いだ。そんなふうには彼女の髪に見入っていると突然彼女がまた振り返り向いた。

「授業中スクデでメールしない？私、退屈すぎていつも困ってるの」  
僕にとってそれは思ってもみない提案だった。

「でも、スクデのトップ画面は教師に丸見えだぜ」

「大丈夫、教師たちは絶対にそんなことでわざわざ怒ったりしないから。あの人たちは自分たちに課せられたノルマをこなすので一杯一杯なのよ」

彼女は教師たちの特性をよく知っているみたいであった。だがそれは何も不思議なことではなかった。なぜなら彼女は生徒会のメンバーであったし、学校の裏側について詳しいのは当然であった。僕たちはその日以来、授業中にスクデを使ってメールのやり取りをするようになった。

窓の外！すぐ近くにスズメが来た！早く見て！

僕は窓の外を見た。確かに窓際をスズメが歩いていた。こんなに近くでスズメを見たのは初めてかもしれない。

ほんとだ。めっちゃ近い

あつ、飛んで行っちゃった

いや、向こうの校舎にとまったよ

えっ、うそ？あれは別のスズメじゃない？

うそじゃないよ。ずっと見てたんだから

あれ、向こうの校舎の屋上、七羽のスズメがとまっている

僕は向こうの校舎の屋上を見上げた。屋上の端に七羽のスズメが羽を休めていた。オレンジ色の背景に茶色い点が七つ。それはとても美しい光景だった。

その日の放課後、僕は橋と一緒に下校した。電車も途中までは一

緒だったし、僕も彼女と話すのは楽しかった。

彼女の家の最寄り駅に電車が到着した。僕はそのまま電車に乗って帰るつもりだったのだが、彼女が急に最近パソコンの調子が悪いから直してほしいと言いだした。慌てて僕は電車から降りたのだが、一体何故こんな直前になつて言うんだと少し疑問に思った。彼女の家までの帰り道で彼女が話し始めた。

「コウタくんってお父さんいるの？」

僕は突然、脈絡のない質問をされたので戸惑ったが、いるよと答えた。彼女はうつむきながらゆっくりと歩いて、次の言葉を探しているように見えた。彼女の髪が夕日を照らし返している。

「私のお父さん、私が中学三年のときに自殺したの。ホームから線路に飛び込んで」

僕は言葉を失った。彼女は僕のほうを見て、どうでもいいことを話してしまつてごめんなさいと謝った。彼女は微笑を浮かべた。そのとき僕は、彼女がとてもか弱い子供のように見えた。

「早希？大丈夫？」

「うん。全然平気よ」

彼女の顔はいつもの明るい顔へと戻っていた。

彼女の家の前に到着すると彼女が僕にキスしてほしいと言いだした。僕は黙って頷くと、彼女の唇に口づけをしてあげた。長い口づけをしてあげた。それは僕のファーストキスであり、彼女にとつても、それはファーストキスであった。そう信じたいと僕は思った。

その晩、僕は夢を見た。いつもと同じように立方体の部屋の中に閉じ込められており、周りは透明な鏡に囲まれていた。しかし、鏡の中に僕の姿はない。鏡に近づいてみた。するとあることに気がついた。それは鏡などではなくガラスだったのだ。そのことに気づいたとき僕は思わず後ずさりしてしまった。ガラスには僕の姿が映らない。これは透明なガラスだ。ふと下を見てみると床がない。当然

だ。床もガラスなのだ。見えるはずがない。そのとき僕は、なぜ今までガラスが見えていたのか分からなくなった。突然、自分は今、部屋の中になどいないのではないかという気がしてきた。それもそのはずだ。光も何もない部屋の中でガラスが見えるはずがない。そう思った途端、僕はまっさかさまに落ち始めた。猛スピードで僕は落ちていく。

気がつくと僕はまた鏡の部屋に戻っていた。目の前の鏡には、僕の姿が映っている。鏡の中の僕は僕に向かって語り始めた。

「どうだ、忘れモノは見つかったか？」

「もう少しで見つかる気がする」

「いい調子じゃないか。だけど、まだ早いぜ。一番怖いのは早とちりだ。早とちりだけは避けなければいけない」

「早とちり？」

「そう、早とちり。自分の忘れモノがこれだったって決め付けてしまふ恐れがあるんだ。そんな簡単に忘れモノは見つからないってことを忘れちゃいけないぜ。何かを忘れていることを忘れないのと同じようにな」

「何かを忘れていることは忘れないようにいつも気をつけているよ」

「オレができることは限られている。もう少しだけ手伝ってやることはできるけど、その先どうなるかは分からない」

「どういふことがよく分からないんだけど」

「もう少し待てということだ。急がば回れって言うだろ。それと同じさ」

そう言い残すと鏡の中の僕はまた奥のほうへ歩いていってしまった。

そのメールは火曜二限の数学の時間に僕のスクデに届いた。

小説読む気ない？

早希からのメールであった。僕は読書というものがあまり好かなかったのだが、早希と出会ってから小説ならば読んでみてもいいかなと思うようになってきていた。僕は早希に返信した。

読む気あるよw

今日、私のお気に入りを持ってきたの

何ていう小説？

星の王子様っていうの。とても読みやすいから安心して

聞いたことはあるよ。分かった、今日読むよ

この数学の授業が終わったら渡すわ

了解

その日の夜、僕は自分の部屋で早希に借りた星の王子様を読んだ。文体は幼稚だが内容は予想以上に濃密なものであった。読み終わってから僕は思わず星空を眺めなくなった。窓を開けて空を見てみたが、街の明かりに照らされて、星は一つも見えなかった。僕は少し悲しくなったが、明日、早希に感想をしゃべるところを想像すると気分が良くなってきた。僕はスタンドを消して寢床に入った。

星の王子様読んだよ

どうだった？

面白かった。また、別の小説貸してよ

そう言うと思って、今日も別のやつ持ってきた

やったね。また今日読むよ

読んだら感想聞かせてね

僕はそれから毎日、早希の持っている小説を借りては自宅で読み、次の日学校へ行ったときに返した。早希が貸してくれた小説は全て面白かった。恋愛、SF、ファンタジー、推理、ホラーなど、ジャンルは多岐にわたっており、どれもが素晴らしい名作たちであった。そして、僕と早希は週末になると二人でどこか静かな場所に遊びに行つて小説の話をした。あの主人公はどうして彼女を見捨てたのだからとか、あの機械たちは火星に何のために移住したのだろうかとか、あの女はどうして夫を殺したのかとかそういった面白いことを語り合った。そして、それは僕にとつてとても嬉しい時間であった。

その日、僕と早希は楽後園に来ていた。メリーゴーランドに乗ったり、お化け屋敷に入ったり、天ぷらうどんを食べたり、ジェットコースターに乗ったり、キャラクターと写真を撮ったりして、楽しい時間を過ごした。日が暮れかけていたので早希は明るいうちに観覧車に乗りたいと言い出した。僕は暗くなつてから乗ったほうが夜景が見えていいのではないかと思つたが、夕日に照らされる街並みを見るのも悪くないなと思ひ、観覧車乗り場へと向かった。係員に入場券を見せると乗降場に案内され、赤い観覧車が右上から下りて

きた。観覧車の扉が開いて、早希が先に乗り込み、左の座席に座ると僕も続いて乗り込み、右の座席へと座った。係員のおじさんが扉を閉めて上空で開かないようにしっかりと外側でロックをかける音がした。

「外側からロックかけられちゃったら中からは出られないわね」

早希はそう言って笑った。僕はもし上空で観覧車が止まってしまつたら自力では出られないことを何だか怖く感じた。そして、それは上空で観覧車が動かなくなることもよりも恐ろしいことのような気がした。観覧車はゆっくりとその高度を上げていった。地上の建物、電車、自動車が次第に小さくなっていく。眼下の街は夕日の影でほとんどが暗闇に包まれているように見えた。光の当たっている部分はおくわずかで、その裏側では、大きな闇が両腕を広げて待ち構えている。そんな情景に心を委ねていると早希が話し始めた。

「コウタは高いところ怖くない？」

「いいや、別に」

「私は怖いわ」

早希はそう言うと、視線を窓の外から僕の目に移した。

「私、高所恐怖症なの」

「じゃあどうして観覧車に乗ろうなんて言い出したんだよ」

「コウタがいれば大丈夫だと思ったの」

「そんなこと言われても困るよ。僕は何もできない。ここに座っているだけ」

「どうしてそんなこと言うの！」

早希の形相が変わった。彼女の目の奥に憎しみとも恨みともいえないおそろしいものが見えた気がした。ところが一瞬後には、早希はいつもの早希に戻っていた。

「ごめんなさい。でも私、高いところがほんとに苦手なの。そつちに行つていい？」

「いいよ」

早希は立ち上がって僕の隣に腰掛けた。観覧車が大きく揺れた。

「ここにいれば私は大丈夫な気がする」

「なら、ここにいればいいさ」

「ありがとう」

早希は僕の膝の上に寝転がって僕の目を見つめた。

「こうしていればコウタしか見えないし、自分が今、高い場所にいることを忘れることができる」

「それは便利だ」

「そんなこと言わないで。私は本当に高いところにいることを忘れようとしているの。コウタの目にはもしかしたら映っていないのかもしれないけど、私は今、あなたの想像がつかないぐらい高いところにいるのよ。そして、そこはとてつもなく恐ろしいところなの」

「もし僕がその高いところから早希を低いところへ降ろしてあげられるのならそうしてあげたい」

「いいえ。それはできないの。それは分かっている。コウタにできることは私が高いところにいることを忘れさせてあげること、それだけなの。そして私は忘れていた間だけ幸せになれるの」

「それは何だか悲しいな」

「でも仕方ないのよ。時間は戻らない。特に失ってしまった時間だけは決して戻ってこないの」

「そんなものかな」

早希は静かに目を閉じた。僕はそのときの早希が幼女みたいに見えた。僕がこの小さな弱い女の子を守ってあげるんだ。そのとき僕は、強く自分の心に誓った。そして、彼女の髪を僕の右手でやさしくなでてあげた。早希は目を閉じたまま呟いた。

「キスして」

僕はゆっくりと前かがみになって、彼女の口に僕の口をつけてあげた。長い長い口づけであった。これが僕のセカンドキスであった。そして、彼女にとってもセカンドキスであった。そう信じたい。

その晩、僕はまた夢を見た。

「どうだ、思い出してきたか。お前の忘れてしまった大切なモノを」  
「少しずつだけだ」

「いい調子だ。そろそろオレの役目は終わりかもしれない」

「ちよつと待つてよ。まだ思い出してないんだ」

「大丈夫さ。もうじき思い出す。ただ一つだけ忠告しておくけど、お前の忘れちまった大切なモノはもしかすると忘れちまっておいたほうがいいモノかもしれないぜ」

「どうということ？」

「早希も言つてただろうが。人間は忘れることしかできないって。そういうことだよ」

「分からないよ。もっと分かりやすく説明してよ。さっぱり分からないよ」

「現代科学は何を見つけたと思う？」

「えっ、何だよ急に」

「現代科学は一体何を発見してきたのかってお前に聞いているんだよ」

「現代科学？現代科学は様々なものを見つけてきたさ。アインシュタインの相対性理論、ボーアの量子論で科学技術は目覚ましい発展を上げた」

「馬鹿かお前。一体何の話をしているんだ。今のオレの問いは現代科学が何を見つけたかだ。どんな技術が生まれましたかっていう簡単な問いとすり替えるんじゃないやねえよ」

「ごめん」

「やっぱり心配になってきたぜちくしょう。いいか、現代科学は何も見つけていやしないんだ。オレが科学者たちの功績を認めるとしたらだ、それは一つだけだ」

「それは何？」

「分からないことを増やした」

鏡の中の僕は立ち止まって僕の目を見た。

「分からないことを増やしただけさ。結局のところ何も分かってはいやしないんだ。でも奴らは分からないことを増やしちまったことを忘れちまつてる。だから研究するんだ。奇妙な連中さ」

「確かにそうかもしれない」

「いいか、これはお前が未熟者だから親切心で言っただけなんだ。お前は何か大切なモノを忘れちまつてる。これは間違いない。

そして、オレがそれを思い出させようと協力してやつてるんだ。ここまででは分かるな」

「うん」

「ところがだ。オレはオレであると同時にお前でもあるんだ。ここが一番ややこしいところなんだ。お前が完全にオレであったなら話は簡単なんだ。オレがオレの忘れちまつたモノを思い出すだけではない」

「うん……」

「だが、オレは忘れちまつたモノを思い出せない。何故かオレにはその能力がないんだ。そして、その能力はお前しかもっていない。

だからオレはお前にこうやって話しかけ、そのことを教えているんだ」

「なるほど。ようやく分かってきた」

「いいか。お前は忘れちまつた大切なモノをようやく思い出しかけている。だがオレは同時にある懸念を抱いている」

「懸念？」

「そう、懸念だ。お前、コンピューターに詳しいだろ」

「うん」

「仮想メモリーって分かるか」

「一応」

「なら話は簡単だ。オレはコンピューターでいうところの仮想メモリーなんだ。本当は存在していない。だから、オレがしゃべるのはお前にとっては非常に危険なことなんだ。お前はコンピューターでいうところの実メモリーだから実際に存在する。だから、お前が

何かしても深刻なエラーが発生することは決していないんだ。

「うむ」

「長々と話してきたが、要するにオレが何かをするということは危険なことだということとは認識してくれ」

「でも、もうすでに君はでしゃばってしまっている」

「……オレはそのことに関して少なからず後悔している。もう少し安全で確実な方法があったのかもしれないけど今となってはもう遅い。ここまで来てしまった」

そう言うのと鏡の中の僕はまた歩き出した。

「気にしなくていいよ。君は僕に大切なモノを思い出させようとしてくれたんだろ。そのどこが悪いことなんだい？僕はもう少しで忘れてしまった大切なモノを思い出せる。それでいいじゃないか」

「そうか。お前がそう言うってくれると嬉しいよ」

「あとちよつとがんばろう。一緒に。せつかくここまで来たんだ」  
「そうだな」

鏡の中の僕は僕に向かってにつこり笑った。

「オレはもう行くぜ。もしかするとオレはもうお前に会えないかもしれない。でも楽しかった。またどこかで会おうな」

鏡の中の僕はそう言い残すと奥のほうへと歩いていった。鏡の僕は次第に小さくなり、しばらくすると小さな点になって見えなくなった。僕は不思議と寂しくはなかった。むしろ、心の底から勇気が湧いてくるように感じられた。僕は鏡の中の僕に向かって叫んだ。

「さよなら…」

ジリリリリリリリリリリ

僕は目覚ましの音で目が覚めた。アラーム音が部屋中に鳴り響いている。僕は目覚ましの頭をやさしく叩いて、彼の鳴き声を止めた。すると、窓の外からスズメの鳴き声が聞こえてきた。僕は徐々に快

眠ってきたなと思った。実際、目覚めは最高であった。頭はすつきりしているし、気分もいい。時刻を確認すると七時三分。寝坊もしていない。僕はベッドから降りて、大きく背伸びをした。今日は月曜日。一週間の始まり。僕は気持ちを新たに部屋を出て洗面所へと向かった。台所からは母が包丁で何か食材を切っている音が聞こえてくる。洗面所に到着した僕は洗顔料を手に取り顔を洗った。顔を洗い終わると両手で水をすくって髪の毛をぬらした。昨晩は本当にぐっすりと眠れたようで寝癖がものすごいことになっていた。四苦八苦してなんとか寝癖を直し、ドライヤーで乾かした。乾かし終わると僕は自分の部屋へと戻った。クローゼットの中から学生服を取り出し鏡の前で着替えた。僕は鏡に向かって笑い顔を作ってみた。いい笑顔だ。やはり今日は調子がいい。僕は階段を下りて食卓へと向かった。

食卓に着いて、僕は驚いた。テーブルの上には僕の好物であるオムライスが用意されていた。朝食にオムライスとは少々奇妙であったが、僕は特に気に留めなかった。僕は喜んでオムライスを食べ始めた。おいしい。何て今日は素晴らしい日なんだ。僕はそう思った。

朝食を食べ終えた僕はまた洗面所に向かった。洗面所に到着して、コップにさしてあった赤色の歯ブラシを手に取り、歯磨き粉を先端につけ、歯を磨いた。磨き終わると両手で水をすくい口の中をゆすいだ。とても爽やかなミントの香りが鼻腔を包む。歯磨き粉を含んだ水を吐き出し、僕は歯ブラシを赤いコップに戻した。大きな声で台所に向かって行ってきますと叫んで、僕は家を出た。

駅に到着した僕は自動改札機に定期券をかざし、駅構内へと入場した。階段を上り、ホームに出て、前から三両目のマークが地面に描いてある場所で次の電車を待つことにした。僕の経験上、前から三両目が一番空いているのだ。待ち始めて五分程経過しただろうか。いまだに電車が来ることを知らせるランプが点滅しない。おかしいなと思っているとアナウンスが流れた。どうやら、人身事故が起き

たらしい。そのせいで電車が遅れているということだ。僕はついてないなと思ったが時計を見るとまだ始業まで一時間近くある。今から三十分電車が来なくても間に合う。だが、そのとき僕は三十分待っても電車が来ない予感がした。そして僕は安全策をとって、今日は電車ではなくバスで通学することにした。

バスが宇都後高等学校前に到着した。僕は料金を支払いバスから降りた。しばらく道なりに歩くと宇都後高校の正門が見えてきた。まだ始業時間の四十分前だったので、登校している生徒の数はとても少なかった。正門に着くと門の右脇にいる先生に挨拶された。

「おはよう」

「おはようございます」

僕は軽く会釈をして先生に挨拶をした。挨拶とは気持ちのいいものだなと僕はそのとき思った。玄関から校舎内に入り、自分の下駄箱にスニーカーを入れ、B棟二階にある自分の教室へと向かった。

教室に着いてみると僕のクラスメートはまだ誰一人として登校していなかった。僕は自分の席に座ってスクデの電源をつけた。始業開始時間までまだ三十分もあったため、暇つぶしのためにいつも持ち歩いている小説を鞆の中から取り出して読み始めた。十ページ目に突入したとき、校内放送が流れた。事故の影響で電車通学の生徒がほとんど始業時間に間に合わないため始業を一時遅らせるという内容であった。そういえば確かに朝、電車が人身事故で動いていなかった。僕は自分がバスで通学してきたことを誉めた。僕の判断は正しかったのだ。見る、他の生徒は誰一人として学校に到着していないではないか。僕が正しかったのだ。僕は始業開始まで小説を読むことにした。

始業時間がやって来た。ところがいまだに誰一人として登校してこない。先生すらも教室に現れない。僕は少し不安になった。とりあえず小説を片付け、職員室に行くことにした。

職員室の扉を開けてみるとそこには誰もいなかった。ただ蛍光灯の電気はついており、パソコン画面も光っていた。僕はもしかして

体育館で朝礼をやっているのではないかと思い体育館へと向かった。体育館にも誰もいない。それもそうだ、まず朝礼をするなら必ず放送なり先生が教室に来るなりして朝礼があることを知らせるはずだ。そんなの当たり前じゃないか。僕はもう一度自分の教室に行ってみることにした。もしかしたら誰か登校しているかもしれない。しかし教室には誰もいなかった。僕は諦めて自分の席に座った。ここまであちこち歩き回ったのに誰にも出会わなかったということ。は、もしかして今日は休日ではないかという疑問が湧いてきた。きっとそうに違いない。そうでなければおかしい。僕は自宅に帰ることにした。スクデの電源を切るために画面左下にあるスタートボタンをタッチした。すると、最近開いたフォルダの欄に見慣れないフォルダが一つある。フォルダ名は”saki”。一体これは何だ。僕は”saki”というフォルダをタッチした。

パスワードを入力してください

画面中央にタブが現れた。パスワードだと。一体何のパスワードだ。大体こんなフォルダを作った覚えは全くないぞ。……いや、……ある。確かに僕はこのフォルダを作った。そして、このフォルダ内に保存したんだ。かすかに覚えている。そして、ついこの間、僕はこのフォルダを開いた。だが、パスワードだと。何だ。パスワード……くそつ、思い出せない。

僕はしばらく思い悩んだ挙句、鞆の中から一冊の小説を取り出した。星の王子様。僕はその題名を見た瞬間何かを思い出した。星の王子様……prince……。僕はパスワードの答えがプリンスであるような気がしてきた。そうだ。princeだ。いつもprinceと入力して僕はこのフォルダを開いていたんだ。僕は画面下方に表示されているキーボードをタッチしてprinceと入力した。

フォルダが開いた。……何も無い。空っぽだ。何故だ。

僕はこのフォルダの中にいつも保存していたはずだ。何で何もないんだ。どうして……。いや、待てよ。何かがおかしい。僕は何かをこのフォルダ内に保存した。それは事実。だが、フォルダ内には何もない。このフォルダ内のデータは学校の共有データベースに転送されて、そして……。一体どうなったというのだ。僕は考えるのをやめた。ふと気づくと教室にはクラスメートたちがすでに登校してきていた。どうやら電車が復旧したらしい。安心した僕はスクデから目を離して前を見た。白い花瓶。一輪の赤い花。んっ？何だこの花は？えっ？どうしてスクデの上に花瓶が飾られているんだ？これじゃあこのスクデを使っている生徒に迷惑じゃないか？

「死んだんだよ」

声のするほうを見るとツトムが立っていた。

「橘早希だよ」

「橘早希？……。ちよつと待って……。何だか、頭が……。痛い……。早希？……。ああ、早希か。何言ってるんだよツトム。彼女はまだどうこうしてないだけだ。あいついつも始業時間ギリギリに来ていたじゃないか。今日もまだ登校してないだけだ。なあ、ツトム」

「だから、橘早希は死んだって言ってるだろ」

「ウソだ！早希は死んでなんかいない！だってつい昨日まで僕は早希と一緒にいたんだ！どうしてそんなウソをつくんだ！」

「落ち着けコウタ」

「落ち着けるか！」

「落ち着けて」

「はあ、はあ、はあ……」

「いいかコウタ。お前は橘早希と付き合っていた」

「そうだよ。今も付き合ってる」

「いや違う。今は付き合っていない」

「？」

「だから何度も言ってるだろう。橘早希は死んでしまったんだよ。そこに花が飾られているじゃないか。それが証拠だよ」

「嫌だ！そんなの信じない！だって僕はついこの間まで早希と一緒にいたんだ！早希の家に行って早希のパソコンを設定してあげたし、一緒においしいオムライスを食べた。学校では毎日のように授業中スクデでメールのやり取りをした。早希からたくさんの小説を借りて読み、そして語り合った。休日には楽後園にだって行ったし、学校からの帰り道も一緒だった。今日も早希と授業中にメールをするつもりで僕は学校に来たんだ。早希とのメールが僕の唯一の学校での楽しみなんだ」

「いい加減目を覚ませよコウタ」

「目を覚ますだって？僕はとっくに目覚めているよ。僕は早希と約束したんだ。赤い観覧車の中で僕は誓ったんだ。早希を守るって。心の底から強くそう思ったんだ。だから早希が死ぬはずない！」

「コウタ、早希は自殺したんだよ」

「!!!!」

「校舎の屋上から飛び降りた。無残な最期だったよ」

「黙れ！どうしてそんなウソをつくんだよ！ツトム、君は僕の友達だろ！どうしてそうやって僕を傷つけるんだ！」

「お前が大切なモノを忘れちまってるから言っちゃってるんだ」

「……大切なモノだって」

「そう、大切なモノ」

「一体僕は何を忘れたんだ」

「思い出だよ」

「……」

「早希との思い出」

ツトムはそう言っていると僕の隣の席に座った。

「お前は、早希との思い出を忘れちまっていたんだ。そして、早希との思い出の中でも一番大切な部分を忘れてる」

「それは何だ？」

「早希が自殺したことだよ」

「うるさい！うるさい！黙れ！黙れ！」

「落ち着けてコウタ」

「嫌だ！嫌だ！嫌だ！僕は信じないぞ！こんなものがあるから混乱するんだ！」

僕はそう言っただけで早希の座席にある花瓶を叩き割った。キャツという叫び声が教室内であがった。

「おい高峯！何やってるんだ！」

教壇にいる国語教師が僕に向かって怒鳴った。僕は混乱して何が何だか分からなくなった。国語教師が教壇を降りて僕のほうへ詰め寄ってくる。

「近寄るな！」

僕はそう叫んで席から立ち上がり教室から出ようとした。

「待て高峯！一体どうしたんだ！戻って来い！」

僕は教室を出て廊下を走り出した。景色がものすごいスピードで僕の後ろへと流れていく。階段に着いた僕は迷わず駆け上った。上る上る上る上る……

ダンッ！

屋上の扉を思い切り開けた。青い空に白い雲がいくつか漂っている。ふと屋上のへりを見てみるとそこには早希が立っていた。

「早希！」

僕がそう叫ぶと早紀は振り向いた。

「コウタ、どうして屋上に来たの？」

「ツトムが早希は自殺したなんて言い出すんだ。それで僕びっくりしちゃって」

「自殺？私が？ははは、とんでもない。どうして私が自殺なんかするの」

「そっだよな！ああ、安心した。早希、そこ危ないからこっちにお

いでよ。一緒に教室に戻ろう」

「嫌よ」

「えっ、どうしたんだい急に？」

「ごめんなさい。コウタ、あなたは何も悪くないの。それだけは分かって。これは私自身が私自身のために下した決断なの」

「決断？何を言ってるんだよ早希、一緒にまたメールしようよ」

「人間が最も輝く瞬間っていつだと思っ？」

「さあ、こっちへおいで」

僕は早希のほうへと近づいた。

「来ないで！」

早紀は叫んだ。

「それ以上来ないで。そこで黙って私の話を聞いて」

「分かったよ。僕はこれ以上進まない」

そう言うつと早希は安心したみたいで微笑を浮かべた。

「私、人間が最も気高く美しくなるときが分かったの」

「.....」

「自ら自らの命を絶つ覚悟を決めたとき、人間は最も素晴らしい存在になるの。戦国時代、武士が自らの腹を切る切腹という儀式があったでしょ。私、その話を小さなときに知っただけど、そのとき思わず興奮しちゃったの。だって、まだ生きられるのに自ら生きることをやめるのよ。生物の生きたいという本能を捨てて、自らの命を絶つのよ。どう？コウタ。素晴らしいと思わない？この世界に自殺以上の覚悟は存在するかしら？」

「早希、落ち着くんだ」

「私はいたって冷静よ。どこかの学者が人間は自殺をする唯一の生き物だと言っていたけどあれはウソよ。私知ってるもの。ミツバチたちは外敵が巣の中に入ってきたときに敵に群がって高熱を出すの。女王バチを守るためにね。外敵を蒸し焼きにするの。そして、自らの命も捨てる。これを自殺と呼ばずに何と言うのかしら。女王バチのために自分の命も顧みず、敵に立ち向かう。これはまさしく自殺

行為よ。だからね、私思うの。生物には生きたいという欲求はあるけれども実は自殺したいという本能も生まれつき備わっているんじゃないかって」

「早希、もうやめようよ」

「いいえやめないわ。コウタ、この前私を守るって誓ってくれたんじゃないの？じゃあ守って見せてよ。私はすでに自殺する覚悟を決めているの。さて、コウタはどうやって私を守ってくれるのかしら」

早希は依然として僕に笑いかけ続けている。

「きれいな空ね」

早希は空を見上げた。僕はここぞとばかりに早希に向かって走りだした。そのまま空を見つめていてくれ早希。あと早希まで数メートル。

「来ないでって言ったでしょー！」

パシッ

間に合った。早希は足を踏み外していない。僕も屋上の上だ。握った早希の手にはじつとりと汗がにじんでいた。

「なぜ助けたの？」

「早希が好きだからだよ」

早希はうつむいたまま黙り込んでしまった。

「さあ、教室に戻ろう。またいつもの生活に戻るんだ。授業中に他愛もないメールをして、休日には楽後園に行こう。それでいいじゃないか」

「やっぱりあなた何も分かってないわ」

早希は顔を上げない。

「私の勘違いだったみたいね。ほんと早とちりって怖いわね。取り返しがつかないわ」

早希は顔を上げて僕を見つめた。その目には涙がいまにもこぼれそうなくらい溜まっていた。

「一緒に飛んでくれる？」

今度は僕が黙り込んでしまった。しばらく考えていると、何もかもがどうでもよくなってきた。そして、全てが夢の中での出来事のように思えてきた。

「分かった。飛ぶよ。飛んでみせるさ」

僕は強く念じた。神さま、もしあなたが本当にいるのなら今このときだけ力をお貸しください。どうか僕に飛び下りる勇氣をお与えください。僕は目を固く閉ざして天に祈った。

バサツバサツ

大きな羽音が聞こえる。ふと後ろを見ると僕の背中から二つの真っ白い大きな翼が生えていた。

「すごいわコウタ！」

「へへっ、どうだい。僕はやろうと思えば何だってできるんだ。早希、君を守ることだってできる。早希、僕を信じて」

僕は早希を抱きかかえると空へと飛び立った。

「早希、どこに行きたい？」

「ほら、あそこ。楽後園の赤い観覧車が見える。あそこに行きたい」  
早希の顔は喜びで満ち溢れていた。

「早希、キスしてもいい？」

「もちろんよ」

僕は早希に口づけをした。それはとても長い口づけであった。そして、これが僕のサードキスだった。彼女にとってもこのキスがサードキスであった。そう心の底から強く信じたい。そういうふうに僕は思ったのであった。

(後書き)

一番最初の病院でのシーンを入れるかどうかで作品の趣が百八十度変わると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5977u/>

---

大切な忘れモノ

2011年7月14日03時27分発行